

日本の文学

62

永井龍男
阿部知二

中央公論社

永井龍男
阿部知二

昭和43年8月24日初版印刷
昭和43年9月5日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

永井龍男

黒い御飯

絵本

朝霧

青電車

風

そばやまで

狐

風ふたたび

7

11

14

31

42

50

59

76

少年唱歌隊

蜜柑

一個

傘のありか

冬の日

青梅雨

阿部知二

冬の宿

黒い影

おぼろ夜

443

375

253

241

227

211

203

196

189

注 解
説 年 譜

河盛好蔵

520 506 497

口 絵
挿 画

「冬の宿」

井上長三郎

「朝霧」「そばやまで」「狐」「風
ふたたび」「蜜柑」「傘のありか」

小磯良平

「冬の日」

「冬の宿」「黒い影」「おぼろ夜」

井上長三郎

永井龍男

黒い御飯

小学校も卒^そえることができずに、小さい時から工場通いをして続けてきた兄が、工場の帰りにカバンを買って来てくれた。A社の給仕に出ている二番目の兄がそれへ名前を書いてくれる。

そうして明治何年かの四月一日、母はいそいそした私の手を引いて小学校の門をくぐった。私はきつと、次兄の着古した紺^{こん}飛^ひ白^{しろ}の縫い直したのを着、新しいごわごわの袴^{はかま}と、新しいカバンと新しいびかびかする帽子をかぶって、しかし、傍の者から見た私の姿は、袴にはかれ、帽子にかぶられ、カバンに下げられていたに違いない。きつとその日は好い天気であつたろう。

父は体が弱かった。八、九年も、同じ印刷所の校正係をつとめていた。その間に、他の仲間たちはどんどん好い位置を占め、社も発展して行った。しかし父はいつもガラス戸のはまった寒い、暑い校正室の中で、赤い筆を

持っていた。

——私はよくそこへ、夜業のある時などにお弁当を届けに行った。蚊をつぶした新聞紙のようになった、校正刷りがたくさんあつて、印刷所特有の、鉛や、紙や、インキの湿った臭^{にお}いが、薄暗くなった狭い室の内にただうっていた。

明り取りのすりガラスが鉛色に明るく、夕暮れのもつ蒼^{あお}さに透いて、やせた父の頭の上に四角くあつた。

「とうさん、ほんのちよつとしか箸をつけなかったんだが、お前たべないか」

ある時（あるいは二、三度ばかり）父はそう云つて、昼に弁当屋からとつた弁当の残りを差し出したことがあつた。平生私は、父をけちんぼだと思つていた。父がけちんぼなのを考えると悲しくなることもあつた。薄暗くなった室の内で父の視線と私の顔が会つた時、私はそれをよけて不機嫌^{ふきげん}に云つた。

「たべない」

私は憂鬱^{ゆううつ}になつた。どうしてこんなことをする父であらう。残つたものなんか、さつさとやっつけてしまえばよいのに。私は横町の家へ帰ってから、つまらなかつた。家からその印刷所へ行くまでの十五分ばかりの道に、そこには活動写真などもあるのだが、五日おきに縁日がたつた。ちやうど、お弁当を持って行く日が縁日であつ

たことがある。縁日には、近所の子供たちは申し合わせたように、二銭ずつ貰うのが例であった。私も、昼間のお小遣いを貰わないかわりに二銭ずつ貰った。その日はお弁当を持ってそこへくるまで、縁日を忘れていた。無論、昼間の分はつかった私は、はっとした。母はもう一銭しかくれない。皆が二銭ずつ持っているのに、自分は一銭しかないということが、どんなに寂しいことである。

「父にねだって見よう」

道を歩きながら私は考えた。それはかなり云いにくい、望みのないことだった。父はけちんぼだったから。包みからお弁当を出して、もじもじしていたが、思いきって云って見た。父はがま口から二銭銅貨を出して、私の手の平へのせてくれた。あの大きな重い二銭銅貨を。（こんなことのあったせいであろうか、今でもあの不便な二銭銅貨は、ひと昔とでもいったような懐かしい重みを持っているように感じられる）そうして、その夜は大尽にでもなった気で縁道を歩き廻った。

父は小心な、曲ったことのできない（しかし道で拾ったぼちちりの金ならば、そっとしまっておくような）ほんとうの小人であった。不孝者の私は父を吝嗇な人（おんしやく）と思っていた。しかし、父はそれより仕方なかったのだ。父は咳が出た。それには永い間葉がいった。それに、私た

ちのような暮しをしている者には、明日の保証がちつともないのだ。ことに父のような病弱な人にはその感じが強かったであろう。

「もし明日にでもどうかしたら……」

何事に対してもまず父の頭へはそうした言葉がひらめいたであろう。父は少しづつ、少しづつ、恥ずかしいほど少しづつ貯蓄をした。

頬のこけた、髭をはやした顔、そうして自分で染め直した外套を着て、そろそろ、そろそろ、下駄を引き摺るようになって歩いてくる父の影が、私の心へ蘇える。それは、もうかなり病いが重くなつてからの姿だ。父はいよいよ動けないという日まで勤めた。

虎ちゃんという、いつも頓狂なことを云って笑わせる私の友達の八百屋の子は、私たちの仲間の前で突然こんなことを云ったことがある。

「たっちゃんとお父さん偉いんだってさあ！」

「なぜ？」

仲間たちの顔と顔を見比べる虎ちゃんの悪戯な顔を、私は薄気味悪く、そして間が悪るげに見つめる。

「だって髭をはやしているんだもん！」

そう云って虎ちゃんは、げらげらと高笑いをする。

「ちえっ！ 髭をはやしているもんはどうして偉いの、ええ虎ちゃん」

私は激しい恥辱を感じて突っかかって行く。すると他の仲間が、とぼけたことを云う。

「あたい髭をはやした電車の運転手を見たことがあるよ」

そういう私たちの、子供らしい皮肉のまじった会話は、私の父が大儀そうに社から帰ってきて、私たちや仲間の傍を通って行ったあとの、夕暮れの中で交されたような気がする……。

しかし、あまり父のことを語りすぎた。

その明治何年かの四月一日の夜、私たち一家はお膳をとり囲んでいた。話題は私の初登校のことであつたろう。父は時々酒を飲んだ。その夜も一本の酒が父を上機嫌にしていた。「お屋敷のお婆さん」と母たちに呼ばれている、昔御殿女中をしていた養母に育てられた父は、酔うとよけいに切り口上になった。私は私が一家の内で大変幸福者であることや、従って一生懸命に勉強しなければならぬこと、皆の恩を忘れてはいけぬことなどを、説き聞かされて涙ぐみながら御飯をたべた。私たちの前にはひっそりしたおかずがある。こうした父の説教は一度や二度のことではなかった。私はそれが大嫌いであつた。自分だけがうんと重荷を負わせられているような気がしてたまらなく憂鬱になる。泣き虫の私の眼から溢れる涙は、貧乏に生まれついたのを怨めしく思う涙で、決

して病氣と戦い、生活と戦う父や、一年中手の平のざらざらしている母や、小さな時から工場や会社へ勤めつけてきた兄たちへの、感謝の涙ではなかつたのだ。

母は、一同の食事の終るころに、私が明日から学校へ着て行く普段着が、あまりに汚れていることを思い出した。そして、次兄の古いかすりがあるが、あれではあまりひどいと思うとつけ加えた。母はそれを縫い直してくれようかと云うのだ。父はその紺がすりを見た。それは大分色が落ちていた。父はそれを染めてやるという。母は危ぶんだ。紺がすりを丸染めにしては、変なものになつてしまふからだ。しかし父は受け合つた。

「子供の着るものなんか、さっぱりしていきいすればなんでも好いんだ。あした少し早く帰ってきて俺が釜で染めてやる」

父には、自分のやけた外套を染め直した経験があつた。

狭い台所は、釜から登る湯気で白かつた。たすきをかけた父が、湯気の中で動いている。引窓を見上げると星がもう光っている。

釜の下では薪がぼうぼう燃えている。釜の中には黒い布と黒い湯とがにえたぎっている。父の手首も黒い。そうして、髭が、湯気であろうか水鼻汁であろうか、ぬれて光っている。(父は一生懸命になると、よく鼻汁が髭

を伝った。自分の眼鏡めがねの蝶ちょうつがいを外はずして、細工をした時などの様子が眼めについている。

さて、翌日のことだ。綺麗きれ好きの母が、あれほどよく洗った釜で炊たいた、その御飯はうす黒かった。うす黒い御飯から、もうもうと湯気が上った。

「赤の御飯のかわりだね」

誰かがそんなことを云う。染められた紺がすりは、まだ乾ききらずに竿さおにかかっていた。

幾日かの後、私はその染め直した妙な紺がすりを着て、一年生の仲間に入っていたことであろう。

私も、「前途有望な少年」であつたのだ！

絵本

雨が降っている。古風な機関車が真白な煙りを吐いて止まっている。それは葱をふみながらきき耳立てた雄ん鶏に似ている。パラソルの骨のように、線路は停車場へたぐられる。お前の電車が一生懸命で駅へ走る。赤い陸橋を斜めに抜ける。シグナルの色は次第に濃くなる。貨物車は海ぎわに幾筋にも列んで、雄ん鶏の来るのを待っている。海の上にひろがる空は黄ばんで霽れそうに見える。海は、古いフィルムを一杯にほぐしたり、透かして見たりしている。夕方の白さが駅を中心にしてどこにも見える。

山の手の森の中の家に灯がつく。

駅の中は夕刊のにおいがする。車掌の手袋は汚れている。停車場は顔を持っている。

お前はそこからホテルへ行く。お前のタクシーは天道虫のように、ゆるい坂から山の手へのぼる。ホテルには日本人がたくさんいる。たくさん日本人がほんとうに

いる。お前も黒い服で椅子に倚り、時を待つ。威張った東洋人はみな毀れている。日本人のお前がそう考える。わざとお前はいろいろのことを考える。

結婚式がとうとう始まる。親戚は皆似ていない。弟は若くて兄貴は年取っている。白い長い卓子の上に、明るい酒と赤い酒と黄色い麦酒がおのおの小さな影をつくって行く。えらい参観人のある日の孤兒院の食事に似ている。お前は胸に白いナフキンを四角にひろげて行儀よく待つ。パンの脇に一人ずつ日本人がいて口を動かしている。*タル博士やフェザア教授はどこにいる？ だんだん不思議な気がしてくる。

お前のキスして別れた花嫁と、お前を知っている大柄な花婿が並んでいる。

お前はナイフとフォークで曲芸がしたくなる。伊勢海老が皿の上でにらむ。お腹がよくないと仲人が立ち上る。次ぎの人が立つ、皆の体がほどけて御婦人は色をばらばら落す。

当り前な気がする。不思議な気がする。知っている人がいる。知らない人がいる。子供の時に見た絵本の中の、魚の宴会が動き出す。

皆立ち上る。椅子がきしる。シャンパングラスを差し上げる。シャンデリアの光が激しくグラスへはいる。さまざまな親指の腹の指紋のうずまきが一様にお前へ拡が

つてくる。眼まいがする「花婿よ、お前の鼻のちいさからんことを」

負けた西洋将棋がばらばらになる。

酒場で。お前はホイルバックの強い曲りに片腕かけて、味の濃い酒を時々取り上げる。小さな舞台に幕が下りたばかり、カップやグラスの触れ合う音が、風のある日の椎の大林の中の、雀のさえずりが陽射しのように、人々の語り合う中から光る。お前の、テーブルの陰に重なったエナメル靴には、もう、うつすりほこりがたかっている。

裏口の料理場の窓から投げられたすっぱい輪切りのレモンが、ごみ箱の蓋について、そのまま凍ってしまふ。鼠は暗がりではびげの根もとを両手でかいている。

お前はこんな隅の方に気持のいい居場所を見つけたお前の機転をはめる。落ち着いてのんでいるお前の知らないお前の酔い。夜が更ける、踊り子はやっぱり寒むそうに見える。踊り子の腕の白粉がお前の黒い羅紗に残る。

「お前の夢を見るよ」

一人の男を送りながら、うしろから女がそう云うのをお前は遠くではつきりきく。男の手は一枚の札を握って女の手にくるまれる。男は動き出す。ボオイがオーパーにくるんで戸外へ捨てる。女はチップを胸へながし込む。

小魚を呑んだ黒い鵜のなまめかしさに似ている。女は舞台に倚りかかって煙草を喫う。何気ないようで、女はまた小魚をさがしている。両ひじを舞台へのせて、まだ生きている魚の動きを腕の中に見せる。お前は女の視線へ人差し指を上げる。にこりともせず女はものなれた翼のゆるやかなひととおりで、人々の間をぬけてくる。となりへ腰かけて、重くない女はつまらない。女は喫みさしの煙草をお前の口へはさませ、お前の胸の手布を抜いて己れの口のまわりをふく。強い酒がくる。

やがて酔ったお前が立ち上る。ポケットへ手を入れて札を握る。お前の手は女の手の中にある。お前は憎む。

「お前は何が欲しい？」

女は酔ったお前を見さらしてから、

「いろさ！いろを」そしてすかさず早口に突いてく

る「お前は？お前は何が欲しい」

「俺か！」

お前は女を力一杯突き飛ばしたい。

「俺は生きものを！」

「あばよ！」

扉戸のすっかりおりてしまった街をたった一人お前が歩いている。遠い遠い街角に人影が見えるのだが、すぐなくなってしまう。街だけが残っている。この扉戸の中

には冷たい胴体模型が立っている。この扉戸の中には冷たい眼鏡と時計がある。この扉戸の中には堅い腸詰や蒸焼肉が下っている。ドックの船の腹のように、窓のない商店やビルディングがならんでいる。お前の息は白く、いろいろの物かけをふんで行く。

この都会を離れた夜汽車は、やきとり紙の火先きのように、もうじきに次ぎの町へつくだろう。

お前は花嫁と花婿を祝福しなければいけない。

お前はうつむいて歩いているうちに、いつか舗道の四角いしきりに吸い込まれてしまう。眼が離せなくなる。

四角い舗石は無限に四角につながる。お前は駈けだす。

生きものを！

しきりは網になってお前の足にからんでくる。倒れる。

お前は額を打ってそのまま動かない。タキシの捨てていった油染んだぼろのようだ。お前は凍った舗道にうつむきに倒れ、薄荷の匂いをかいでいる。お前は鼻血をたくさん出したのだ。

人けのないどこかの店の、栓を締め忘れたファウンテンから、どんどんソーダ水があふれている。

「花婿よ、お前の鼻の小さからんことを！」

街燈と並木ができるだけ背伸びをしている。横顔のようになじつとしている明暗のはげしい街なみ。お前にはもう何も感じられない。お前はお前自身の中に浮んでいる

のを楽しんでいて、お前は今夜はもうお袋の家へは帰れない。こんなに静かな街の中で、お前はこのままこつそりと死んでしまうこともできるのだ。

そうだ、ほんとうに、お前は死んでしまうこともできるのだよ。お前の耳よ聴け。

畜生！ どこかに何かがいやあがる。

朝霧

「では、——行つて来ます」

「はい」

ていねいに靴を履き終つた、背に肉のある老人が、立ち上るなりおもむろに振り返つて、チヨッキのポケットから、例のごとく大型な時計を取り出す。

「たぶん、今日の帰りは、五時……十七分くらいになりましょう」

「はいよ」

X氏の口調の折り目正しさに比べて、送り出している老妻の応対は、二度目の早口な「はいよ」にも感じられるように、市井の妻として、多年生活を切り廻して来た上でなければ得がたい、枯れた簡潔な響きを持つてゐる。

X氏の黒い折り靴は、仔豚ほどにいつもふくれ上つてゐる。いったい何が入っているかということも、あとで話題になると思うが、当時私が簡単に想像したように、

教科書その他の参考書や、試験の答案などがぎっしり詰まっているのだろう、ということに今はしておきたい。

硝子戸を引き、その靴に手をかけて、X氏は出て行くとする。だが、足の運びに何か思い惑う様子がある。はたして、老人は再び靴を上り口へ置く。

「いま、たしか五時十七分——と、云いましたな」

「はいよ」

「思い違いでした。五時七分には帰ります」

「はい」

かるく受け答えをしながら、老妻はさつさと靴べらを片づけ、そこにある下駄へ足をのぼす。X氏の後を追うようにして、あるいは追い立てるようにして玄関を出ると、箒をとり勝手口へ廻る。よけいな挨拶も時間もある間にはない。いつものように、玄関の内外が、これから掃き清められるのだ。

すると、もうかなり先きまで行つていたはずのX氏の靴音が、ふたたびそこへ戻ってくる。

「さつき、ね……」

「はいよ」

「五時七分——と云いましたが、やはり、今日は五時十分になりましょう」

「はい、分りましたよ」

白墨の荒れの年中取れたことのない手へ、重そうな靴